

シモーヌ・ヴェイユの不幸の神学

宮沢邦子

序 永遠性の刻印と不幸

シモーヌ・ヴェイユの思索と生き方とは、死後三十五年近くを経た今日、ますます真理を求める多くの人々の関心を引きつけて止まないようにみえる⁽¹⁾。しかしその一方でヴェイユの作品のとりつきにくさや難解さが指摘されることも多い。難解さの原因の一つは、ヴェイユの魂に印された永遠性の刻印、或は絶対の咬傷ともいうべきものにある。

「私の生命よ、

生きるにふさわしくないとこころで

どうして生き続けられようか

愛するかたを想う想いが

矢となっておまえに深傷を

「負わせているのに」⁽²⁾

キリストの人格的示現という神秘体験を得る以前からヴェイユの魂はこの矢傷を負っている。この魂の場合、キリストとの出会いは方向転換という意味の回心を招いたというよりは、すでに魂をみだしていた光がこの体験によって一つの焦点を結んだと見る方が実際に即しているようである。ヴェイユの作品の骨格をなしているのは、この真理への熱愛、或は飢え渴く憧れと、明晰で力強い知性との結合である。政治、社会、労働問題、科学、ギリシヤ文化、歴史、キリスト教思想、その他多彩な問題を取り扱った論文や覚え書きは一見複雑なとりつきにくさを示しているが、その底には常に一貫して整然たる秩序がみられる。どこから出発しても、常に、純粹思惟或は絶対のみが視野にひろがって来る一点にあやまたず導かれるのである。

短い生涯の間ヴェイユの関心は一貫して、不幸な人々や抑圧された階級に向けられていた。この関心は積極的な行動と結びついて一つの人間の経験へと深まりやがて思想の中核となって結晶していく。大木健著「シモーヌ・ヴェイユの不幸論」は、テキストを綿密に追いつながら、不幸という観念の胚胎し成長する過程及びその独自性を示した労作である。その中に指摘される通り、「不幸」が独自の意味を担ってヴェイユの著述の中に現われてくるのは、一九四〇年から四三年という生涯の最後の時期であり、その触媒の役を果たしたのは一九三四―五年にわたる工場体験であるという事ができる。この小論では、特異なものとはいえない一つの体験である工場生活がこの魂の中の何を促して「不幸論」を結晶させたかについてひとつの仮説を提出してみたい。

一 真理への献身

「キリストはキリストになりたもう以前は真理なのでですから、キリストよりも真理を好むことをよしとされるのです。」⁽⁴⁾
どの作品をとり上げてよいのだが、ここでは「デカルトにおける科学と知覚」⁽⁵⁾を通して真理への献身がやがて不幸の神学に深まっていく経緯を眺めてみたい。この論文は、「感覚と情念にとらわれたとりとめない思惟」以外の思惟がありうるかという若いヴェイユにとってまさに死活問題といえる問いをかかけてデカルトの科学を批判検討し、かつ、一個のカルテジアンとして独自の思索

の冒険を試みた興味深いものである。論文の第二部をなす反省の冒険の部分において、ヴェイユは師アランの方法を踏襲して知覚作用のあいまいさを明ならかにした後、「私が感じる私自身の存在は錯覚である。」と結論し、存在の確かさの根拠を作為することの中に置いている。作為とは能動的積極的な面においては、働らきかける精神であり、現実を導き方向づける力である。又受動的な面においては、受けいれ、耐え忍ぶことである。そしてこの二つの作用を結びつけるものとして、ヴェイユの思想にとって不幸と並ぶもう一つのキー・ワードというべき「労働」の観念が早くも提出されている。

この論文の中で、「不幸」の観念の萌芽として私が指摘したいのは、第二部の基調を奏するテームのようにくり返して引用される二〇の文章である。即ち、*∇* *Pouquoi ces choses et non pas d'autres?*⁽⁶⁾（「何故にこれらの事が起って他の事ではなかったのか？」）*∇* *どうして他のものでなくこれなのか？」*という問いと、*∇* *C'est ainsi?*⁽⁷⁾（「それはそのようにある。」）*∇* *そうだからそうなのだ。*（⁽⁸⁾）という答えである。この二つの引用文は、後のヴェイユの様々な論文やノートの中に或はそのままの形で引用され、或は無言の問いかけとして背後で響き続けているものである。ヴェイユのいう不幸は、人間が生きていく過程で時にどうしても避けることのできないものとしてぶつかる意味のわからない苦悩に対して発する「何故なのか？」という問いに始まり、又常にその次元

までおりていく。人間社会のもつ矛盾や歴史の謎に対して、自ら「初めから終りまで本当に目をみはるような真実だけがある」⁽¹¹⁾と記しているヨブ記の主人公のように、正面から問いかけていく姿勢の中から、そのメッセージの純一さと普遍性が出てくるものと思われる。

二十歳前後で卒業論文を書いた時点において、この存在論的な問いと答えとは、すでに長い時間をかけて瞑想されたものとしてあらわれて来ている。非常に緊張を要するこの注視・瞑想を促したものは果して何だったのか。ここで思い出されるのは、靈的自叙伝の中の次の一節である。十四歳の時私は思春期の底なしの絶望の一つにおちこみました。自分の生来の能力の凡庸さに苦しみ真剣に死ぬことを考えました。……本当に偉大な人間だけが入ることのできる真理の住む超越的なこの王国に接近することがどうしてもできないということをお惜しく思っていたのです。真理のない人生を生きるよりは死ぬ方がよいと思っておりました。数ヶ月にわたる地獄のような心の苦しみを経たあとで、突然、しかも永遠に、いかなる人間であれたとえその天賦の才能がほとんど無に等しいものであってもその人間が真理を欲し真理に到達すべくたえず注意をこめて努力するならば、天才にだけ約束されているあの真理の王国にはいれるのだという確信を抱いたのです。⁽¹²⁾
この真理への渴望とそこに到るための方法こそ、ヴェイユがデカルトの中に求めたものであり、かつデカルトの答えを不明瞭、

不完全として批判した所のものである。即ちヴェイユによれば、デカルトは、「いかに相異なる題材に適用されるにしても常に一つであるような」人間の英知そのものに他ならない科学を見出し、「単にそのものに精神を適切に向けさえすれば、他人によって知られうるいかなるものにも自らが達しうる」⁽¹³⁾ような方法について論じながら、新しい科学を組み立てるにあたっては、知識そのものの正しさではなく現実への応用をその原理とするという矛盾に陥ったのである。ここでもデカルトとそれを批判するヴェイユの間には「絶対の矢傷」の有無がもたらす立場の違いが見てとれる。言うまでもなくこの矢傷は人が自分の力で得られる種類のものではなく、この世のどんな条件との間にも因果関係を見出せるものでもない。ただ、「多分不幸という形式のもとでは、神のご慈愛がいかなる人間的類似物も持たないがゆえにより多く明白にあらわれています」⁽¹⁴⁾という意味において、人間の苦しみとの間に何か特別の係わりを考えうるかも知れない。

二 不幸の神学

「神学」という言葉をここでは、生きた信仰体験をふりかえつてのあとづけ、整理の意味で用いる。又、ヴェイユの不幸の神学がまとまった形で読みとれるのは、「神を待ちのぞむ」に収録されたペラン神父への私信と、『神への愛と不幸』その他の論文であると考えられる。

もう一度デカルトについての論文に戻って先に引用した問いと答えを見つめさせずにいなかった苦悩について考えてみたい。ヴェイユ自身はその原因として自己の知的凡庸さを挙げている。凡庸さについての判断の基準は人によって異なるゆえ、これについては何も言うわけにいかない。しかしおそらく多くの人が感じているように私にもこれは充分な理由と思われない。その理由は、ヴェイユの「何故なのか？」という問いはもって人間性の抑圧と深くかかわっているはずだからである。ほとんどすべての論文の中でヴェイユが一貫してみつめているのは、人間が人間らしく生きる事を妨げる抑圧とそれからの解放の問題だからである。ヴェイユの書き残したものを読んでいけばいくほど私にはそこに取り上げられていないもう一つの抑圧、即ち、宗教的伝統という重しの下で、先験的事実のごとく受け取られて来た女性の人間性への抑圧の問題が、「何故なのか？」という問いの最も深い所に言葉にならずに横たわっているように思われてくる。

スペースの関係で伝記的事実の裏づけをすべて割愛せざるをえないが、伝記や、思い出といった文章を綜合してみる所、シモーヌ・ヴェイユという人が、歴史的、社会的、文化的に造り上げられてきたグループ・アイデンティティとしての『女性』の概念にひとりの人間として生きる上で多くの不自由を感じていたことはほぼ間違いないようである。そこでヴェイユは恵まれた才能や環境の力をかりて、ほとんど意識的に自分のうちから女性としての

要素を切り捨てて生きていく。ヴェイユは女性問題についてはほぼ完全に沈黙を守っているが、不幸論の形成される引き金となった工場体験を記録した文章だけはその例外となっている。賃金格差、仕事の分担、その他職場での差別の事実の見聞を受けとめながら、例えばこんな風に書いている。「女子労働者として私は二重に劣等な地位にいました。私の人間としての尊厳が上役たちによってばかりでなく、私が女性なるがゆえに男子労働者達によって傷つけられているのを感じさせられていたということです」問題を感じられてはいる。しかしついに取り上げられることはなかった。

不幸の特徴はそれが表現する言葉を持たぬことである。とヴェイユは度々書いている。

「不幸くらい知りたくないものはない。それは常に神秘である。その本当のニュアンスや原因を把握するためには、とくに内部的分析に慣れていなくてはならない。たとえその準備ができていた場合でも、不幸それ自体がこの思考の活動を妨げる。そして屈辱の結果として思考の立入りを許さない沈黙と虚偽に覆われた禁止地帯ができる。」

出口のない不幸は「何故なのか？」という問いかけさえ不可能にする。そして代りに、結果と原因を取りちがえた説明を進んで理由づけとして受け入れるような心の準備を行うのだ。

シモーヌ・ヴェイユが、アンジのサンタ・マリア・デリ・アン

ジエリにおいて、又、ソレムにおける聖週間の典礼を通してキリストの臨在を体験した一九三七—八年度、ユンクがアメリカにおいて後に「人間心理と宗教」という書物にまとめられることになる講義を行っている。この中でユンクは神秘的シンボルとしての「四」という数を論じつつ、それに関連してキリスト教の三位一体という神観念にふれ、それが父と息子の役割を強調したきわめて男性的なものである事を指摘している。そしてこの神の三位一体性のドグマの中では、女性は存在の余地がなかった、とも述べ⁽¹⁸⁾ている。このような男性中心の神観念——そしてそれは常に人間観と切り離すことができないが——に立つ宗教において女性的特質とは、独立性の欠如或は従属性そのものに他ならず、ヴェイユのように思惟し行動する主体として存在することをもって人間らしさの基準とする女性にとつては、教義そのものが解きがたい矛盾と葛藤を含んだ公案となつたはずである。それを無批判に受け入れることは存在を抹殺される事を代償に生命を贖う行為であり、生きるために生きる理由を失うことなのである。そしてこのキリストを熱愛する神秘家は、ついに教会の閥の外に立ちつくしたまま、中に入る事をしなかつた。

しかしこの矛盾を生きていくヴェイユは、神から最も遠い所に立つ、神に棄てられたものとしてのキリストの十字架にいよいよ深くひきつけられていく。自ら引き抜かれ、こわされていく事しか求めなかつたヴェイユの靈性は、⁽¹⁹⁾たしかに多くの人のいう痛ま

しさにみちており、極端なものだと言わざるをえないかも知れない。しかしこの人の飾り気のない文章の行間にいつも聞きとることのできる歓喜の調べを聞きおとすことは適當ではない。それは十字架を前にしたキリストのよろこびであり、⁽²⁰⁾苦しみを軽くすることもなだめる事もないが、その中心から輝き出てすべてを包む光である。それでもなおヴェイユの靈性の不毛さという問題が残るとするなら、それはこの人の不幸を覆っていた壁があまりに厚かつたからだ、としか考えられない。

(1) 一九五三年刊のティボン編集による「重力と恩寵」に始まったヴェイユの著作の刊行は、その後論文をはじめ手紙やノートを含めて約二十冊の分量に及ぶ。研究書や伝記も多く又日本語への翻訳もここ数年盛んに行われている。

(2) 十字架の聖ヨハネ著「靈の讃歌」東京女子洗足カメル会訳、ド・ボスコ社、一九六三年、第八の歌より。

(3) 大木健著「シモーヌ・ヴェイユの不幸論」勁草書房 昭和四四年。

(4) 別れの手紙、「神を待ちのぞむ」田辺保・杉山毅訳、勁草書房 昭和四二年 四二頁。

(5) 「科学について」福居純・中田光雄訳、みすず書房、一九七六年収録のエコール・ノルマルにおける卒業論文。

(6) 同右 序論 四頁。

(7) 同右 第二部 五一頁。

(8) 同右 八七頁以下。

(9) ポーマルシエ著「フィガロの結婚」第五幕、第三場より。

(10) ヘーゲル著「小論理学」より。(9)・(10)は「シモーヌ・ヴェイユ著作集」Ⅲの註による。

- (11) 神への愛と不幸、「神を待ちのぞむ」二〇六頁。
 (12) 別れの手紙、同右、三五頁。
 (13) デカルトの「規則論」より、「デカルトにおける科学と知覚」
 「科学について」三六頁。
 (14) 最後の思想、「神を待ちのぞむ」六八頁。
 (15) 工場長への手紙、「労働と人生についての省察」一六四頁。
 (16) 工場生活の体験、同右、二四六頁。
 (17) ルソー「社会契約論」平岡昇編、中央公論社、二三四頁。
 (18) 「人間心理と宗教」浜川祥枝訳、教文社、昭和四五年、一二五〜
 二二六頁。このユンクの説に関しては殊にマリア崇拜との係わりにお
 いて論ずべき余地が大いにあると思われるが、ここでは一つの事実の
 指摘として提示するにとどめる。
 (19) シモーヌ・ヴェイユ著「超自然的認識」田辺保訳、勁草書房、一
 九七六年、二二五〜二二六頁参照。
 (20) ヨハネによる福音書十五章十一節。

(みやざわ・くにこ、会員)